

南風 こまち

ひどい気分だ。

タツヤとはうまくやっている、そう思ってたのに。

誰もいない自宅のリビングには、西日だけがゆつたりと差し込んでいる。私はソファにうずくまるように座り込んでいた。膝を抱え、視界を伏せるように。何も見たくなかった。誰の声も聴きたくなかった。

目を閉じても涙は止まらない。耳を塞ぐ。頭から締め出そうとすればするほど、タツヤの姿が思い浮かんでしまふ。

『俺たち、付き合わね?』

そう言ったのはあんななのに。

『今度、お前の家に行つていいか?』

そう言ったのはあんななのに。

『ミカはいいの?』

『ほっとけよ、アズミ。あんなやつのことなんて。どう

セミカにはばれやしねえって』

『あはは、いけないんだ』

タツヤ……。

どうして……!!

瞼越しに室内が暗くなつていくのが分かる。

日が暮れる。

もうすぐおじさんが帰ってくる。夜はほんの用意をしないと。

そう思いつつも、気怠さに体が動かない。

でも、おじさんには何か食べさせないと。

分かってはいるはずなのに、動きたくない。

いつそのこと、私を食べてもらおうか?

目を開ける。既に夕陽はビル街の向こうに消え、夜が

すぐそこまで忍び寄っている。

私を食べてもらおう?

そんなバカバカしい考えを捨てられなかった。

タツヤには今度、食べ残しても食わせればいいや。

もうこうなったらヤケだ。

私は口元が吊り上がるのを抑えきれなかった。

あいつがその気なら、こっちだつて。

『おーい、帰つたぞ』

夜が街を覆い、おじさんが帰ってきた。

* * *

「何だ、メシはねえのか」

「ごめんね、おじさん。ちよつと疲れちゃつて」

おじさんは私を少し変な目で見て、ジャケットのポケットから財布を引っ張り出す。

「仕方ねえな、何か食いに行くか」

「ねえ、おじさん」

「ん? 何だ、リクエストか?」

「ちよつと、こつち来て」

おじさんは軽く眉をひそめつつも、大人しく私の隣に

腰を下ろした。

「お前、何か変だぞ」

「おじさん」

私はおじさんを逃がすまいと、素早く太ももに馬乗り

になった。私の髪がおじさんの無精ひげをくすぐる。

「おい……何のつもりだ、ミカ?」

私は精一杯笑う。心のどこかで虚勢を張っていること

は分かっていたけれど、今は悪い自分に酔いしれたい。

「おじさん、食べ物ならあるよ」

顔を近づけ、肩に手を回す。

「ねえ」

おじさんの一重瞼の中にある茶色い瞳孔を覗き込む。

そこに写る私は、悪い顔をしていた。

「お父さんはどうせ出張で帰ってこないし、黙っておくからさ。だから、ねえ」

おじさんは黙ったままだ。

「私にイケナイコト、教えて？」

ダメ押しにささやく。するとおじさんは、肩に乗る私の手を掴んだ。

「いいんだな？　そこまで言うなら、今夜はとことん寝かさねえぞ」

おじさんは目をぎらつかせて言った。私の精一杯の笑顔なんて跡形もなく吹っ飛ばすような、狼のような笑顔を浮かべながら。

「えっ」

「そうと決まれば準備が必要だな、買い物してくっから待ってる。逃げんじゃねえぞ」

おじさんはそのまま私を脇にだけ、夜の中へと出て行ってしまった。

* * *

うそお！？

いや……たしかに期待してたけどさ！

まさかこんなにやすやすと事が運ぶなんて。

ただそれは、私にはあまりにも展開が速すぎた。

「ど、どうしよう……」

準備してくるって、とんでもないことになりそうな予感しかない。

「帰ったぜ」

突然、おじさんの低い声が聞こえて私はびくりとした。リビングのドアが開く。

私は思わず息をのんだ。

「おじさん……それって……！」

両手にぶら下がるレジ袋の中には、大小の箱。私はこ

れから自分の身に起こることを予感して、スカートの裾をぎゅつとつかんだ。

「イケナイコトをしてほしい、そう言ったのはお前じゃねえか」

悪魔のような匂いが私の鼻に届く。

「もうこいつ抜きでは戻れねえ体にしてやる、いいな？」

おじさんは邪悪な笑みを浮かべ、大量のそれをテーブルに投げ出す。

「でも、そんなことしたら、私……！」

「はん、口だけは強がりでも体は正直みたいだぜ？」

「やだっ、聞かないで」

おじさんはレジ袋の中身をテーブルいっぱい広げ、箱の中身を開ける。

「ほら、もうこんなに垂れてるじゃねえか。お前も我慢できねえんだろ？」

「きゃっ、いやっ」

「ほら、口開ける。俺のをしゃぶらせてやるよ」

抗えなかった。

戻れない。

私は大人しく口を開ける。

「いい子だ。入れるぞ、しつかり啜えな！」

おじさんは、スプーンですくった山盛りのバナリアイスを私の口に詰め込んだ。

「さあ、悪い子の時間だ！」

バケツアイスに巨大ピザ、2リットルのコーラ、徳用ポテトチップス、山盛りの唐揚げ……大量のジャンクフードを目の前に、また私のお腹が鳴った。

* * *

口元から垂れたたれを拭き、宴会が始まる。

「バケツアイスから行くか、溶けると面倒だ」

軽く2キロ近くはありそうなバケツアイスに少しも怯むことなく、おじさんもガツガツとスプーンを突き刺し始めた。私も負けじとスプーンを突き立てる。どかり、と音がしそうなほど大きな塊に歯を突き立ててかじりつく。口の中に鋭い冷たさと包み込むような甘さが溶け合う。

「おお、いい食いつぶりじゃねえか」

おじさんは目を細めながら自分でもバナリアイスの塊を頬張り、レジ袋の中に手を伸ばす。

「おじさん、それって」

「ん？　何だお前、バケツアイスってのはこうやって食うんだよ！」

袋から取り出したカラースプレーをドバドバとバナリアイスの上に放り込む。あつという間に白い地肌は水色、黄緑、オレンジ、ピンク……いかにも体に悪そうな鮮やかな色合いで埋め尽くされてしまった。

「はいよ、食うか？　うまいぜ」

私は力を込めておじさんのバケツアイスにスプーンを突き立てる。段々溶けてきたみたいで、さっきよりもねっとりしたアイス触感につぶつぶのチョコレートがぱちぱちと碎ける感触がする。でも、さすがにちよつとバナリアに飽きてきたかも……。

「ただチョコレートをぶっかけるだけなのも芸がねえ、お前にはこいつだ」

「ベリーソース？」

「おうよ、これをぶっかけた上でこいつをぶっ刺せば即席パフェの出来上がりだ」

そういいおじさんは、私のバケツアイスにドバドバとイチゴソースをかけ、チョコウエハースを何本もズボズボと突き立てる。ウエハースに手を伸ばすと、ぱりぱり

した食感の中に甘酸っぱいイチゴと優しいバニラの味がした。

「さーて、お次は……」

「ピザ！ ピザがいい！」

「よしてきた、任せとけ」

おじさんは平たい箱を開ける。『The Will Make Pizza Great Again!』とのセリフと金髪のオーナーの顔が印刷された蓋を開けると、帰ってきた時から漂っていた悪魔のようなチーズとトマト、バジルとアンチョビの匂いが一気に広がる。

「トランプ・ピザのスーパーカルテトスペシャルとデラックスカルテトだ。お前、ちよっと切ってる。俺は準備してくる。先に好きなのを食っていいぞ」

おじさんはそう言い、私にピザカッターを任せてどこかに行ってしまった。私は軽々とアイスを平らげたものの、口とお腹が冷たい。そのまま私はチーズで埋め尽くされた一角に丸い刃を突き立て、切り離す。口に運ぶと熱いチーズがトマトの果汁と混じり合いながら、ねつとりと糸を引く。

「ふあ、あつふ、あ」

「おいおい、やけどすんなよ？」

おじさんが笑いながら戻ってきた。何か手に持っている。

「あ、おじさん、それって」

「借りてきた。こーゆー時には映画が一番だ。お前、このシリーズ好きだろ？」

誘拐されたプリンセスを巡って死闘を繰り広げる少年探偵と大泥棒のアニメ映画を観ながら、私は次の一枚に手を伸ばす。アンチョビの塩気とガツンとしたにんにくが容赦なく舌に襲いかかる。

「シーフードバジルもうまいぞ、食うか？」

「うん！」

「あいよ、ほれ」

ぷりぷりしたエビの触感とバジルの香りに、ますます食欲が止まらない。

「もうらー」

「あつ、そのセサミピザ狙ってたんだぞ！」

「へへーんだ」

おじさんが狙っていたピザも横取りして口に運ぶと……わっ、なにこれ！？

「か、辛い！」

「あーあ、タバスコかかっているから気をつけろよ。ほれ、コーラ飲むか？」

燃えるような口の中にどろどろと甘いコーラで流し込む。コップなんてない、ボトルにそのまま口をつける。

「ミカ、その箱開けてみる」

「ふえ？」

ツナマヨコーンピザの残りを口に詰め込み、私はテール隅の箱に手を伸ばす。鶏のイラストが描かれた蓋を開けると、ぎっしりと唐揚げが詰め込まれ、もうもうと湯気を立てている。

「うめえぞ。でかいのかじりつけ」

マヨネーズでべたついた口に一番大きな塊を一口で詰め込む。ギトギトの油がザクザクの衣から、熱い肉汁が鶏肉の繊維からあふれ出す。

「レモン、かけるか？」

私は口がふさがったまま首を縦にふる。備え付けの小袋からレモン汁をかけ、箱の隅にタルタルソースを絞出す。

「じゃ、俺はこいつを……」

「あ、おじさんずるい！ フライドポテトもあるなんて！」

「んだよ、ケチだなあ。少しくらい分けてくれたっていいじゃねえか。ほれ」

私はまたコーラを喉に流し込み、細切りにされたフライドポテトに手を伸ばす。塩だけのシンプルな味だけではやがて物足りなくなり、付け合わせのケチャップをまぶす。

「おい、ミカ。いいもんを見せてやる」

おじさんはレジ袋からパルメザンチーズを取り出した。「こいつをポテトにかけると美味いんだぜ」

あつという間にただでさえ黄色いポテトが真っ黄色になってしまった。私の手を伸ばす。ペースが速くなる。チーズはピザでも散々食べたけど、粉チーズをそのまま味付けに使うなんて卑怯だ、乱暴すぎる味に抵抗できない。「んでもって、シメはこいつだ」

おじさんは指についた塩と粉チーズをなめ、空になったピザの平箱にポテトチップスを何袋もドサドサとぶちまける。うすしお、サワークリーム、明太チーズ、のりしお、コンソメ、何でもありだ。

「一枚一枚ちまちま食うなんてしみったれた真似はやめだ、頬張れ！」

私とおじさんは先を争うように、手当たり次第にポテチを口に詰め込んだ。

*

*

あれだけあったはずの食べ物はいつの間にか全部きれいさっぱりなくなり、映画はエンドロールに入った。

「あー、楽しかった！」

「だろ？」

私はソファの背もたれに大きくもたれ、天井を見上げ

る。

「あーあ、明日の体重ヤバいだろうなあ……せつかくタツヤのためにしぼったのに。」

「ミカ。……学校、どうだ？」

「私は左隣のおじさんを見た。おじさんは無精ひげに食べかすをつけたまま、テレビの方を見ている。」

「親父が心配してたぜ。最近、お前の様子がおかしいってな。あまりメシも食わねえし、どこか上の空で。だから出張の間にお前を頼まれたんだ」

「おじさんは優しく言う。それが合図になったように、私は宴で忘れていた涙を思い出す。」

「……タツヤに浮気された」

「そうかそうか。泣け泣け、お前はいい子だからな、たまには悪いことも覚えなくっちゃいけねえ」

「おじさんは優しい手つきでティッシュで私の涙と鼻水を拭いながら、少しずつタツヤのことを聞き出していく。」

「……なるほどなあ、あいつのためにダイエットしてた矢先、アズミとかいう女に横取りされたわけだな？ けしからん野郎だ、今度会ったら二人もろともぶっ飛ばしてやれ」

「で、でもおじさん……」

「イケナイコトをするのって、楽しいぞ？」

「おじさんはニンマリと笑う。」

「あんなだけ食べている間、タツヤのことなんぞ考えなかっただろ？ お前にとってタツヤとかいう甲斐性なしのフニヤチンは終わった男なんだよ。ただまあ、泣き寝入りも癪だ、違つか？」

「私は少し迷ってから、小さく頷く。」

「だろ？ 大丈夫、お前はまだ若いんだ。いっぱい食べていっぱい泣いたら、後はあの二人をポコポコにしてや

れ。女の恨みは怖えって見せつけてやれ、いいな？ 大丈夫だ、センコーが何か見当はずれなこと言ってきたら俺がぶん殴ってやる」

「……うん！」

「いい返事だ！ おっと、もうこんな時間か」

時計を見ると、既に日付が変わろうとしていた。

「おじさん、ありがとう。元気出た。片付けは私がやるから……」

「何言ってるんだ？ 今夜は寝かさねえって言ったろ？」

「私は度肝を抜かれた。おじさんは悪い笑みを浮かべ、ソファの陰から何かを取り出した。」

「おじさん……本気？」

「あたぼうよ、お前にはまだまだ悪い子の教育が足りねえみたいだからな。……何ニヤニヤしてるんだ？ さあ、徹夜で遊びまくるぞ！」

「おじさんは私にコントローラーを投げてよこした。」

「俺、残機99ねえとクリアできねえんだよな。あ、また死んだ」

「あはは、よっわーい！」

このあと滅茶苦茶ゲームした。

翌日、ミカは傷だらけになって帰ってきた。体のあちこちに絆創膏やテープをつけている。

「帰ったか、どうだった？」

夕焼けから夜の闇に色合いを染め変える部屋の中、ミカは高らかにブイサインを掲げた。

「タツヤの鼻折って、アズミの髪むしってきた！」

「おっ、やるなあ！ 大戦果じゃねえか！」

「へへーん」

ミカは青あざができた左目を閉じてウインクした。

「そうとなれば決まりだな、出かけるぞ」

「えっ？ どこ行くの？」

「んなもん決まってるんだろ」

「俺はジャケツトを羽織る。」

「戦勝祝いは焼肉って相場が決まってるんだよ！」

「やったー！ おじさん、ありがとう！」

ポケツトの中に入りますます薄くなる財布と胃薬を放り込む。そして俺は、ニコニコと笑う姪っ子を連れて更けゆく夜の街に飛び出した。

*本作は合同誌BLOOM2021年号に掲載されたものです。